

大澤功教授を悼む

飯田, 泰三

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

92

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

1995-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003563>

大澤功教授を悼む

法学部長 飯 田 泰 三

一九九四年二月七日夕刻、大澤先生は自宅の書斎で突然、持病の喘息の発作に襲われ、呼吸不全で救急車で病院に運ばれたが、数時間後、奥さん子供さんたち家族の見守るなかで、六十三歳の生涯を終えられた。その日、先生は経済学部商法の期末試験の答案、千六百枚の採点をすべて終了し、ほっと一息いれて次の仕事に掛かるべく、書斎の机に向かったところだったという。ペンを握ったまま机の上に倒れたその死は、学者として壮絶な戦死とも、名譽ある殉職ともいえるものであった。

先生は一九三一年二月二〇日、北海道勇払郡厚真町に生まれ、一九五三年三月、法政大学法学部法律学科を卒業した後、同大学院社会科学研究所私法学専攻の修士課程に進んだ。五五年三月、法学修士の学位を取得、ひきつづき同大学院博士課程に進み、五八年三月、同課程修了。法政大学法学部非常勤講師を経て、一九六三年四月、同法学部専任講師に就任した。ついで六五年四月、法政大学法学部助教教授となり、六九年教授に昇進する。

こう見てくると、一見きわめて坦々と学者への道を辿ったかのごとくであるが、先生の学生時代は時あたかも戦後

民主主義はなやかなりしころ、「民主法政」の中にあつて先生は自治会活動で活躍するなど、青春を謳歌された面もあつたらしい。また、その温かい人柄にくわえ、法政一筋のキャリアということもあつて、学生や職員の信望が篤かつた。法律相談部のほか、柔道部、弁論部等の学生サークルの部長も務められた。二十年近く前、たまたま私のゼミの学生に弁論部員がいたので話題にしたところ、先生は「他大学の弁論部は右翼的な学生の勇ましいのが多いのにたいして、法政は平和と民主主義だから、弁論大会では威勢において欠けがちなんだが、彼らはけっこう頑張っているよ。」と笑つておられた。他方、職員からあつい信頼を寄せられていたことが、七〇年前後の紛争時などには、かえつて先生に累を及ぼした点もあつたかもしれない。

もとより、学者、教育者としての先生の功績は大きく、主要業績については別掲の著書・論文リストを見ていただきたいが、株式質入れに関する一九五九年の力作論文をはじめとして、一九六六年の改正商法についての解釈上の諸問題を考察した論文、会社法、手形・小切手法についての体系書等があり、いずれも丹念に商事判例と学説を集めて分析し、体系的整理を試みたものである。会社法、手形・小切手法についての体系書は、その平易な記述とあいまって、法律実務家および司法試験・公認会計士等の国家試験受験者にも有益なものとなっている。テキストとしては、数年毎に改訂版を出して、最新判例や法改正をふまえて改善に努められていた。ちなみに、先生のゼミ生、また法学部課外講座である法職講座で永年指導した学生の中から、多くの判検事、弁護士を送り出している。さらに、経営学部課外講座の公認会計士講座も長く指導し、ある年など、公認会計士試験の商法の問題のほとんどを予測的中させたことがあつたとは、お通夜の席で同講座に関係した職員の語っていたところである。

先生は法学部および大学院私法専攻（のち法律学専攻に改組）の商法のほか、経営学部、経済学部の商法講義も

担当し、さらに、通信教育部、公務員試験講座等でも懇切に学生を指導して定評があった。法政大学外でも、立正大学、東京経済大学、上智大学、日本大学、帝京大学等で非常勤講師を務められた。学会においては、一九九〇年十月からその死去にいたるまで、日本海法学会理事として海法学会の充実・発展に努める、等の活動があった。

法政大学内の役職としては、一九七八年に法学部法律学科主任および大学院私法学専攻主任を務め、さらに八五年から四年間、法政大学通信教育部長ならびに学校法人法政大学評議員に任ぜられた。とくに通信教育部長としては、地方教室授業（地方スクーリング）の拡充に努力されたことが特筆される。これは先生が多年、通教インストラクターとしてのレポート添削による指導や、夏期スクーリングを通しての社会人教育、生涯教育にたずさわってきた経験から、その必要を強く感じる場所があったことだろう。

こうして先生は、幼時に患った小児麻痺の後遺症による脚の不自由をもとめせず、温和な中に不屈の意志を秘めて、研究に教育に力を傾注し、戦後の法政大学とともにあゆんでこられたが、学部長の職に就くことは辞退された。五年ほど前のことだったか、大学院の卒業式のパーティーの席でだったと思う。「やっぱり学部長は無理ですか」とお聞きしたところ、「若いころからの喘息が良くななくなってるね」と、心労も多い学部長の激職はむつかしいとのことであった。「いつもここに薬を持ち歩いてるんだよ」と、胸のポケットのあたりを押さえて見せ、いつもの笑顔ながら、ちよっぴり淋しそうな表情であった。

しかし先生の志は、先生の育てた多くの人材の内に生きつづけ、これからも生長してゆくだろう。葬儀に駆けつけた多数の卒業生、および祭壇を飾った多くの生花が、そのひろがり語っている。先生に去られたあとに空いた大きな穴をどうやって埋めるか、法政大学法学部としてはあらためて先生の存在の大きかったことに、半ば茫然として思

法学志林 第九十二卷 第三号

四

い及ばざるをえない次第である。

先生は、立派に成長された二男二女と賢夫人に囲まれ、まことに幸せな家庭生活であった。ご遺族のご多幸をお祈りし、先生のご冥福をお祈りすること切であります。